三愛学舎広報誌　第2号　（2018 年 1 月発行）

〒028-5133
岩手県二戸郡一戸町中山字軽井沢 49-33
電話:0195-35-2231　FAX:0195-35-2781　<三愛学舎ホームページ http://www.sanaigakusha.net>

三愛学舎における芸術について

三愛学舎は、今年度創立 40 周年を迎えました。創立当初から、青年期教育において「喜びをもって表現すること」を大切にしてきました。そこで、三愛学舎広報誌第２号となる今号は、本校の教育の柱である芸術について特集します。

本校の教育のねらいに「生きる喜びを追求する」、「健康な身体を培い、表現活動を大切にする」とあります。喜びをもって表現することが、自分を高め、人とのつながりを広げ、生活を豊かにする活力になると考えています。

本科は週１時間の「芸術」活動、専攻科は週１時間の「表現・創作」を設け、個々に応じた自由な表現(造形、書)活動を楽しんでいます。新しい画材や制作方法にも挑戦し、完成した作品は、定期的に校内へ掲示する他、県内外の作品展や公募展へ応募する人もいます。本科３年時には、３年間の学習成果として卒業展を開催します。卒業後も継続して表現(造形)活動を楽しむ生徒も多く、日々の生活を豊かにしていくための大きな活力となっています。

以下に、作品や制作風景を織り交ぜながら、これまでの芸術の歩みと本校の芸術に深く関わった方々を紹介します。

（副校長　岩崎崇）

『アタック 25 の回答者』 佐藤康熙　2016 年

『無題』　池野祐紀　2016 年

【三愛学舎　芸術の歩み】　　（まとめ：久保友基・榮希）

年度	主な出来事
1978 年	三愛学舎開校（岩手町御堂に仮校舎）。 縫工班の作業として、織物や草木染を行う。
1979 年	「美術」として教科に位置づけられる。「美術」は、錯画期、象徴画期、全図式期、図式期等の生徒の発達と実態に合わせてグループに分かれて行う。
1980 年	新校舎落成移転（現校舎）。 カレンダー作り、人物画、ろうけつ染め、共同制作（モザイク、貝殻コラージュ等）を１週間に１回、２時間行う。
1993 年	生活体験の充実をめざし、「絵画教室」として外部講師の橋場あや氏（1993 年度～1999 年度）の指導を受ける。
1996 年	専攻科設置。
1997 年	本科：橋場あや氏の指導の下、「絵画教室」として生活の時間に行う。 専攻科：「芸術」として、陶芸、藤工芸、菱刺し、紙すきを２週間に１回、２時間行う。
1998 年	本科３年生へ集中絵画指導を行う。 盛岡市の『第一書店』のギャラリーにて第１回目の卒業展「三愛学舎１０人の卒展」を開催する。以降、1999 年度まで『プラザおでって』で卒業展を開催する。
2000 年	「絵画教室」から「芸術」へと名称の変更。 外部講師の片岸なお子氏の指導を受ける。 盛岡市の『プラザおでって』にて卒業展を開催する。以降、2009 年度まで『プラザおでって』で卒業展を開催する。
2001 年	外部講師の板垣崇志氏（2001 年度～2007 年度）の指導を受ける。
2002 年	芸術ボランティア講師として「書」の伊藤康子氏（2002 年度～）が加わる。
2008 年	外部講師の片岸なお子氏（2008 年度～）の指導を受ける。
2010 年	卒業展の会場を盛岡市の『アイーナ』に変更する。以降、2016 年度まで『アイーナ』で卒業展を開催する。
2017 年	2018 年 2 月 2 日～4 日、一戸町の『奥中山地区公民館』にて「１２人の卒業展」（第 20 回目）を開催予定。

2001 年 2 月　卒業展の合評会の様子

左から板垣崇志氏、橋場あや氏、澤谷常清氏（当時三愛学舎教頭）、片岸なお子氏

「草の根のかたち」

橋場（はしば）　あや

感動の出会いでした。高原の風はこんなにも透明なのか、と驚く私を、もっと驚かせたのは、三愛学舎の生徒たちの造形力の豊かさでした。一人一人の個性が誇り高く育まれていて、それぞれの泉に下ろしたボーリングに、吹き出す作品群の彩の鮮やかさ華やかさ……。

或る日の授業が思い出されます。

「外に出よう！」今日は草の根っこを掘り出すことから、となかなか抜けない雑草を、スコップで掘り出すことから始めました。高原の雑草たちの、深く広く張りめぐらせたその根っこのしぶといこと……。ひるむかと見たのでしたが、生徒たちの確かな手つきは、長い根の一本一本を大切に掘り上げる優しさに満ちていて、見事に「草の根掘り」は完成しました。

驚きの展開が次に待っていようとは、予想だにしなかったのですが、根の形を良く見よう、と水でジャブジャブ洗い、白々とした根が姿を現した途端、まだ濡れた儘（まま）の根を頬に当て、中には口に含んでその感触を確かめる生徒たち……。本当に驚き、感動しました。

一般的には視覚で捉えるだけで納得する浅い観察を、全身の体性感覚でしっかりと捉える力を持っていたのです。

こうした純粋な観察によって捉えた「草の根のかたち」は、見事なタペストリーに織り上げられ、想貌性（そうぼうせい）豊かな絵画として結晶しました。この純粋で強い造形力の作品群なら、盛岡市内で開かれる美術系大学の卒業展にひけを取らない迫力を持っていると確信し、同時期、同市内で「第１回三愛学舎卒展」を開催したのは、もう 20 年も前だったのでしょうか。現在まで続けて下さっているご誠意に頭が下がります。選ばれた数名ではなく、全員一人一人の個性が見事に磨かれて、美しいハーモニーを生み出し続けていらっしゃる三愛学舎の未来に、限りない敬意と期待の念を捧げたいと存じます。

1993 年 9 月　絵画教室

1998 年 12 月　絵画教室

芸術活動を通して「自分くずし」から「自分づくり」を

澤谷（さわや） 常清（つねきよ）

スイスの教育者ペスタロッチは、どんなに貧しくても、生活環境に恵まれなくても、神から与えられた人間性の力があると子ども達にエールを送っています。

三愛学舎の芸術活動では、のびのびとした気持ちで表現活動に取り組み、よろこびを共に味わうことを願っています。自由な表現は見る者に感動や驚きを与え、生きる喜びを共有することができます。

また、青年期の内面の様子を「絵画」と「言語」で表すこともできます。

Ａさんは、家庭環境に恵まれず、児童施設や学校を転々としてきました。本人は「お姉ちゃんは、お母さんの代わりに学校にもいかずめんどうをみてくれた。…おこる時もあったけどいつも優しかった」。保育園の時は「お母さんがいなく、お昼寝の時いつも泣いていた記憶がある」と述べ、中学校の時に「お昼のごはんがない時に先生が自分のお弁当を私にくれた。周りにみんないたからお姉ちゃんからだよといって渡してくれた」と感謝の気持ちを述べています。

高等部 3 年生になったＡさんは、自らの悩みを打ち明けるようになりました。集団行動は苦手で、行事は不得手であると言います。好きなことは手芸や料理で、時間がある時には何かを用紙に描いたり、切り絵をしていました。

悩みの中には「自分は、なぜこの世に生まれてきたのか？」「なぜ、自分に知的な障害があるのか？」「生まれてくる意味がなかった」「誰からも必要とされていない」「寂しい気持ちがいっぱいあるのに、誰もそばにいてくれない。抱きしめてくれない」「本当に生まれてきてよかったのかな？」「顔、体けい、性格、すべてがきらい」「誰か私に向かって『生まれてきてよかったんだよ』と言って、ずっとそばにいてほしい」「もう一度生まれるとしたら、三愛学舎の先生の家族がよかった。もっともっと頑張って、強くって、明るい気持ちにならないと」等々（2005 年、Ａさん記より）。

Ａさんの悶々とした心模様を「絵」に表現し、その裏面に「流れ」ということばを添えていました。

「流れ」

流れのままに生きていく方が楽だけど、時々流れに逆らって生きていかないとダメな時がある。一人で頑張る事、周りの1人1人に支えられながら頑張っていく事、そうしながら成長していく。

どんなに暗く、出口の見えない道があっても、必ず光が見えてくる。暗闇をのりこえた事、つらかった事、寂しかった事、がんばった事が1つ1つつながって、１本の花となり大きな芽となる。そして大きな優しさと温もりに変わる。（本人の原文のまま）

自分の内面を絵やことばで表現することで、あらたな自分づくりするＡさんの変化は一夜にしてできあがったのではありません。Ａさんの人間性の力を信じ、本人の悩みを周囲の人達が受け止め、励ましながら自己実現への道のりを整理し、支援した結果だと思います。

じっくり時間をかけ、一人一人の内面の成長を見守りながら支援します。子どもが変わり、教師自身も変わります。

「　尊　き　光　」

片岸（かたぎし）　なお子（こ）

折々に、卒業していったＫ君やＭさんからお手紙が届くようになりました。
近況をあるがままに、二、三枚の便箋にびっしり綴っているその手紙は、正しい字や正しい文法だけが、決して本当の気持ちを伝えるわけではないことを教えてくれます。

今年三月に送られて来たＫ君からの手紙には、一人旅をしたこと、乗り継いだ電車の種類と時刻、食べた物を細やかに伝えてきてくれました。Ｋ君の躍動する気持ちが伝わってきます。そんな報告の間にこんな一文がはさまれていました。
「今年も卒業展を開いて頂き、有難うございました、まず良い誕生日を、」
卒業して数年経つ彼が。

三愛学舎の皆さんと過ごす日々の中で、人格の尊き光のようなものを感じる刹那があります。彼らの瞳の奥に神さまを見る一瞬です。
もし、彼らの創り出すものを社会に示す意義を問われたなら、このかけがえのなさを、この光こそを世の中の皆さんへ伝えたい、その思いに尽きます。

心がこめられた手紙と同じ、言葉にならない真実の心が宿ったものは、誰かの心をきっと動かすのです。今日塞いでいる見知らぬあの人が、明日も生きようと思うかもしれない。

私は幼い頃から絵を描いたり、机の引き出しにそっと箱庭よろしく異世界を創りながら、その中に誰とも分かち合えなかった自分の悲しみや痛み、安らぎや希望など、秘められた心を無意識に表現し、生きることに絶望しそうだった自分を支えていたことを実感しています。
その一方で、そうした絵を周囲の大人たちから評価を受けることにより、いつしか自分の心があるがままに描くのではなく、周囲の評価を得ることを意識するようになってしまいました。振り返ると、このことによって私は自分を救ってくれた大切な表現の窓を失っていったのでした。

それゆえに、表現への寄り添いにたずさわるようになってからは、「ただ一人のその人の心」があるがままに表現されているかを大事にしています。
紙の上に引かれた一本の線、ひとつの色に、生徒さんお一人お一人の姿が立ち上がってくる、そんな錯覚を覚えるときがあります。

「紫の炎に包まれた三愛学舎」

板垣（いたがき） 崇志（たかし）

三愛学舎との最初の出会いは、何年だったのだろう、盛岡の第一書店の上で開かれた最初の卒業展だった。私はなぜその会場に足を運んだのだったか。当時三愛の芸術講師を務めていた橋場あやさんからの声掛けだったろうか。

記憶もおぼろとなったが、若き青年教諭だった現在の岩崎副校長にも、私はその時初めて出会ったのだった。終始、何かとても言いたげな不満そうな顔をしていた岩崎さん。その表情を思い出すとニヤニヤしてしまう。さて、何を言いたかったのかなあ・・・。

その後、妻の片岸なお子が三愛学舎の芸術講師になった。片岸が出産のため講師をいったん退くことになった際、今度は代わりに私が数年間講師として盛岡から通うことになった。
数年はオーソドックスな造形表現を題材にした授業をおこなったが、何か新しい、面白いことをしてみたいなと考えていた。やがて生徒主演のビデオドラマの制作を発案し、これが実現。この時の学年主任が岩崎さんだった。ご縁がある。

生徒からやってみたい物語のアイディアを募った。「変身する」「宇宙船を操縦する」「車を運転する」「歌いたい」・・・などなど。笑顔の生徒たちからいくつものアイディアが次々に出された。どれもが断片的なイメージだったが、その沢山のイメージの断片から生徒の夢の広がりを感じた。それらの断片を、ひとつの物語として強引につなぎ合わせてみた。

こうして「高原戦隊サンアイジャー※」が誕生した。私が脚本と絵コンテを書き、生徒と先生たちが役者になり、何週間もかけてワンカットずつ撮影した。

宇宙人襲来。NASA の緊急連絡を当時の北村校長が受け、三愛学舎は宇宙人の攻撃で爆破される。紫色の炎に包まれる校舎。生徒たちは伝説の戦士サンアイジャーに変身し、トラックで宇宙人を追い回し、最後は美しい歌声で宇宙人を改心させる。コスチュームも生徒の自作。岩崎さんを始めとする担任の先生たちは、一人二役ずつ演じた。生徒を戦いに送り出すことに苦悩する教師役と、悪の宇宙人役。どちらも名演技だった。

生徒たちが卒業したあと、その後の彼らの様子を聞く機会があった。

「〇〇くん、作業所にもサンアイジャーのビデオ持って行っているそうですよ。」

トラックで宇宙人を追い回した彼。車の運転に憧れる彼の夢が、ドラマの中でかなった。

その映像が卒業後も彼の喜びになっていたことを知って、有難かった。

他愛もないことに膨大な労力と時間を注ぎ込んで、小さくて大きくておかしくて、たっぷりエネルギーの詰まった愛しい何かが出来上がった。大して意味のないような、とても大切なような。

うん。本当はとても大切なものなんだと思う。大事じゃなさそうなところにある、大事なものっていうのがやっぱりある。

※ 2004 年度　本科 3 年生芸術作品「高原戦隊サンアイジャー」

1981 年 3 月　本科美術

1983 年 7 月　本科美術

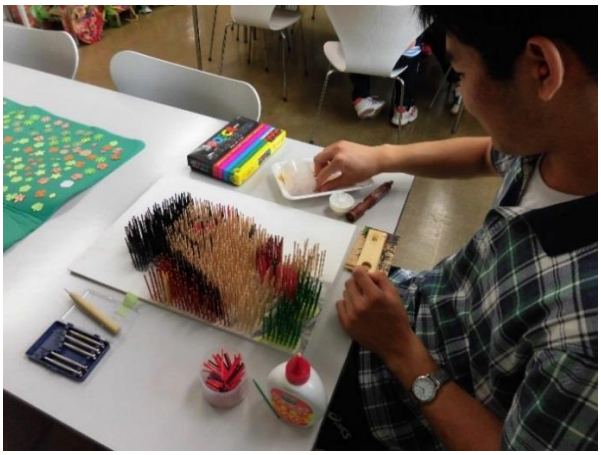
1990 年 4 月　本科美術

1997 年 7 月　本科絵画教室

2000 年 8 月　本科芸術

2009 年 2 月　本科 3 年生卒業展

2015 年 5 月　本科芸術



2017 年 7 月　専攻科表現・創作

【お知らせ】

三愛学舎ホームページ http://www.sanaigakusha.net 『Gallery Sanai』にも作品を掲載していますのでご覧ください。

＜今後の主な行事＞

1月20日（土）	専攻科2年生 成人を祝う会
1月25日（木）	2018年度入学選考日 （在校生徒休業日）
2月 2日（金）	2018年度入学選考合格発表
2月 2日（金） ～4日（日）	第20回三愛学舎卒業展 「12人の卒業展」(奥中山地区公民館)
3月 2日（金）	卒業生を送る会
3月10日（土）	2017年度卒業式

編集後記

三愛学舎の特色である芸術をテーマにした発行物をつくりたい。以前からどうしても行いたい企画でした。企画を進めるにあたり、芸術に深く関わってきた方々に依頼したところ、快く引き受けていただき、にじみ出る想いを表現していただきました。心より感謝申し上げます。

さて、私は 1999 年から縁あって三愛学舎で働くことになりました。その年の卒展の合評会に参加した際、橋場先生に作品についての感想を求められ、無愛想に「何も感じません」と答えた記憶があります。私の卒展に至るまでの過程は、講師に任せっぱなしで消極的でした。そんな自分に腹を立て出てしまったことばでした。そんな初年度の苦い思い出もありますが、生徒の皆さんとの出会い、私自身が一色だったキャンバスに、少しずつ何かが描かれていったような気がします。これからも、一人一人の表現の幅が広がった瞬間であったり、筆を持つまで葛藤している姿だったり、作品を制作するストーリーを大切にし、成長を見守り、一緒の時を過ごしていきたいと思います。

岩崎